

インドにおけるナショナリズムと宗教

著者	宮本 久義
雑誌名	国際哲学研究
巻	6
ページ	7-10
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.34428/00008849

インドにおけるナショナリズムと宗教

宮本 久義

1. はじめに

インドは現在 13 億人を超える人口を抱え、経済的にも 1991 年の市場開放政策により目覚ましい発展を遂げている。インドを訪れる度に、インフラが急速に整備されていくのがひしひしと実感できる。しかしそのような状況のなかで、インドは様々な問題に直面していて、どのような方向に向かっていくのかがなかなか読み取れない。様々な問題のなかには、例えばグローバリゼーションのメリットとデメリットなど世界のいろいろの地域に共通する問題もあるが、今回はシンポジウムでのテーマ「宗教の相克と調和に向けて」に即して、インドの宗教間紛争の問題を取り上げたい。

インドは多民族、多宗教、多言語の国である。このような多次元的社会では、人々の「帰属意識」も多様である。アーリヤ民族に属し、宗教はヒンドゥー教で、母語はラージスターニー語という人もいれば、ドラヴィダ民族で、宗教はイスラーム、母語はタミル語という人もいる。インドはおおむね言語の違いによって州が区分されているが、その州分けと諸宗教徒の地域分布は重ならない。そのような状況下、人口の約 81% を占めるヒンドゥー教徒と約 12% のイスラーム教徒のそれぞれ一部が各地で対立している。特に両者がともに聖地としているバナーラス、アヨーディヤー、マトゥラーでは、警察が常駐して警備する状態が何年も続いている。今回はそのような状況に至った歴史的背景を、主としてヒンドゥー教徒の側のナショナリズム運動の成り立ちを通して考えてみたい。

2. ナショナリズム運動の背景

ナショナリズムという言葉进行定義しようとするると議論が尽きないので、ここではとりあえず、ある集団が何かを核と設定して求心的にまとまろうとする働きと考へておく。ヒンドゥー教徒のなかでそのような運動が見られる最初は、7 世紀頃にはじまる最高神に帰依し恩恵を得ようとするバクティ（信愛）運動である。それは信徒たちの神に対する熱烈な崇拜を基盤として隆盛したには違いないが、一方でそれまで宗教的儀式を独占してきたブラーフマン（司祭階級の人々）の持ついわゆるブラーフマニズム的思想に異を唱えてはじまったともいえる。バクティ運動はナショナリズムとはいろいろの面で性質が異なるが、運動として展開する際に敵対する勢力を持つという点ではナショナリズムと共通する要素を持っている。インドにイスラームが入ってくるのは 7 世紀頃で、その後、デリーを中心にイスラーム王朝の興亡が見られるが、バクティ運動はそれらの王朝のヒンドゥー弾圧に対抗し、16 世紀頃にヒンドゥー・ルネッサンスを开花させることになる。

17 世紀からはヨーロッパ諸国、特にイギリスがインドを植民地化していくが、19 世紀初頭にキリスト教の教義と対比させつつ、ヒンドゥー教徒はベンガル・ルネッサンスと呼ばれる宗教改革運動を展開する。キリスト教とヒンドゥー教は一つの宗教の別の表れとする「普遍宗教」の考へのもと、

融合あるいは共存をはかるヴィヴェーカーナンダのような人や、ダヤーナンダ・サラスヴァティーの「アーリヤ協会」のように、ヒンドゥー復古主義の立場から、ムスリムからヒンドゥーへの再改宗運動（シュッディ）を展開する人々もいた。

1877年、イギリスのヴィクトリア女王がインド皇帝兼任を宣言しインド帝国が成立すると、インドをどのような国にしていくかの議論が盛んになされるようになる。1885年にボンベイ（現ムンバイ）で開催されたインド国民会議派の前身となる集会は、インドの人種差別的行政に非を唱えるイギリス人官僚アラン・オクタヴィアン・ヒュームの呼びかけではじまり、1905年にイギリス人社会主義者ヘンリー・ハインドマンにより創設された「インディア・ハウス」の活動など、当初はイギリス人たちもこの古くて新しい国家を運営するのに尽力したが、次第にインド人たちの手によるイギリス植民地からの独立運動へと様相を変えていく。

3. ヒンドゥー・ナショナリズムの様々な組織の成立

独立への方法や理念の相違によって様々な団体が活動を始めることとなった。1909年あるいは1913年に、政治団体「ヒンドゥー・マハーサバー」が創設された。創始者のM.M. マーラヴィーヤは、バナーラス・ヒンドゥー大学の創始者でもある。しかし実際の指導者はV.D.サーヴァルカルで、ヒンドゥー教に基づいてインドを統一しようとする「ヒンドウトヴァ（ヒンドゥー性）」という概念を掲げ、植民地インドが独立する際、そこからパキスタンが分離独立するという案に激しく反対した。ヒンドゥー教の宗教的精神性・規範を表す言葉には「ヒンドゥー・ダルマ」があるが、あえてその言葉を用いず、「ヒンドウトヴァ」という言葉を創ったのは極めて政治的・戦略的であったといえよう。

1925年、そのメンバーであった医師K.B.ヘードゲワールは、排他的な民族主義を掲げる民族義勇団（ラーシュトリーヤ・スヴァヤムセワク・サング、略称RSS、民族奉仕団とも）を設立。独立直後の1948年にマハートマ・ガンディー（1869-1948）を暗殺した青年ナートウラーム・ゴードセーは、この団体に関係するヒンドゥー・マハーサバーのメンバーであったといわれる。暗殺の理由はガンディーがあまりにもムスリムの考えを優遇しているとゴードセーが考えたためといわれる。

それでは、ゴードセーの凶弾に斃れたガンディーはどのような政治理念を持っていたのであろうかという、別の意味でガンディーの考えもナショナリズム的なものである。彼は、道徳的資質を備え、真理に必ず従う支配者が統治する家父長制のような形態を理想としていたと考えられる。そのような理想的な支配者のもとでは、政治権力も解消される。人々は4つのヴァルナ（カースト）からなる互惠的な分業システムに基づいて働くので、競争原理もなく差別もないと考えていたようである。ガンディーが想い描いていたのは、神話世界でヴィシュヌ神の化身ラーマが理想的な統治をしていたといわれる「ラーマ・ラージャヤ」（ラーマ神の王国・統治）である。たしかにガンディーは自分たちの国をヒンドゥー教を国教とするような国にしようとは考えなかったであろうが、彼のナショナリズムの中心に「ラーマ・ラージャヤ」が厳然とあったことは疑いない。このことは彼の死後も、彼の意向にかかわらず、ヒンドゥー至上主義者の団体が隆盛していく結果を招くことになっていく。

すなわち、1964年には、RSSと同様の団体「世界ヒンドゥー協会」（ヴィシュヴァ・ヒンドゥー・

パリシャッド）も発足する。これらの RSS 系の諸団体は「サング・パリワール」（家族集団）と総称される。

これらの団体の支援のもとに、1980 年代以降「インド人民党」（バーラディーヤ・ジャナター・パーティー、BJP）が急速に勢力を拡大する。ヒンドウトヴァ（インド性）とインテグラル・ヒューマニズムを掲げるヒンドゥー民主主義をテーゼとするとされるが、他宗教の人々の存在、あるいは尊厳を無視するような、独善的ヒンドゥー至上主義の性質も見られる。

インド独立時の首相ネルー以後、その娘インディラー・ガーンディーや、またその息子ラージーヴ・ガーンディーが率いてきた国民会議派が、中央集権的政治や汚職疑惑で支持を失うと、90 年代半ば(1996)にはインド人民党の前身「大衆連盟」（ジャンサング）が下院第 1 党となって連立政権を樹立した（ただし 13 日で瓦解）。1998 年にはアタル・ビハリー・バージペーイーが首相となって、「国民民主同盟」が連立政権を発足させた（2004 年まで）。2004 年の総選挙ではインド国民会議派を中心とする「統一進歩同盟」が勝利し、マンモハン・シンフ首相が政権を奪取した。しかし 2014 年の総選挙でインド人民党が政権の座を奪回し、ナレーンドラ・モーディー政権が発足した。2015 年の 9 月には安倍首相がインドを訪問し、モーディー首相と緊密な関係を築いたことはまだ記憶に新しい。

今までインド・パキスタン分離独立以前から現在までのヒンドゥー・ナショナリストの諸団体の動き、特にインド人民党が政権の座につくまでの経過を見てきた。インド人民党の母体になっている RSS はかなり過激な団体で、それ自体は政治団体ではなく文化団体であるとしているが、日常的に竹槍教練のような疑似的軍事教練を行っている。

私が若い時に留学していたころ、バナーラス・ヒンドゥー大学のキャンパスでは毎週日曜日の早朝、中高生たちが行進や竹槍教練を行っていた。総選挙が近づくと、私のサンスクリットの教授が、インド国民会議派かインド人民党かどちらに投票するか真剣に悩んでいたことを思い出す。政教分離の世俗国家を理念として曲りなりにもそれまで社会主義的な国造りをしてきた国民会議派は、汚職を隠すための強権的政府に堕してしまっただが、さりとて子供たちに軍事教練を課するような右翼的な政党に頼りたくない。まさにこの時期は、戦後堅持してきたインドのリベラルな立場が自ら瓦解し、知識人でさえもポピュリズムの道を選ばざるを得なかったのである。

4. 聖地で噴出するコミュニズム

コミュニズムとは集団あるいは地域どうしのぶつかりあいといった意味であるが、インドはズバリそのものヒンドゥーとムスリムの宗教観紛争を意味する。中世や近代インドでもヒンドゥー・ムスリムの確執・紛争はあったが、現代社会ではその溝はさらに深まったような感がある。

北インドの聖地アヨーディヤーはヒンドゥー教のヴィシュヌ神の化身ラーマの生誕地として知られているが、1528 年、伝ラーマ生誕地にあったヒンドゥー寺院をムガル帝国初代皇帝バーブルが破壊して、バーブリー・マスジッド（バーブルの礼拝堂）を建立した。1992 年、ヒンドゥー至上主義者がそのマスジッドを破壊したことで、大暴動が起こった。現在は連邦政府が管理しているが、今も軋轢が続いている。アヨーディヤーで起こったヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の対立は、その歴史的経緯を含めて「アヨーディヤー問題」と呼ばれ、マトウラーやバナーラスにも飛び火した。

マトウラーはヴィシュヌ神の化身クリシュナの生誕地とされ、紀元前 8 世紀頃、すでにクリシュ

ナ崇拝が隆盛していたともいわれる聖地である。この地のケーシャオ・デーオ寺院は、1669年、ムガル朝第6代皇帝アウラングゼーブにより破壊され、跡地にイスラーム礼拝堂が建立された。1960年、隣地に「クリシュナ生誕地」という名称の寺院が建立され、それ以降緊張が続いている。

バナーラスはシヴァ神の聖地として知られるが、信仰の中心であるヴィシュヴァナート寺院は12世紀以降、何度も破壊された。1777年に復興された寺院は、現在多くの警官によっての入口を厳重に警備されている。

以上の歴史的経緯をみると、両宗教徒間の対立はイギリス植民地時代には表面的には「凍結」されていたことがわかる。両者の対立が顕在化するのにはインド独立に向けての政治運動の渦中で、宗教的教義がナショナリズム運動と結び付けられたことがその最大の理由であろう。また、「アヨーディヤー問題」を引き起こした直接の要因は、イスラーム原理主義とそれに対抗する急進的ヒンドゥー至上主義の対立である。

対立解消の兆しが見えない状況下、2006年3月7日、バナーラスで同時多発テロが起こり、多数の命が奪われた。ヒンドゥー教徒の一部は抗議の座り込みをしたが、テロの現場の一つとなったサンカトモーチャン寺院の管長ヴィールバドラ・ミシュラ師が中止させた。その理由は、対立を煽り続けていては、憎悪が限りなく続くだけだ、というものであった。彼はムスリムの指導者と対話をして事態の鎮静化に努めた。異なる宗教を信奉していても、信仰を持つ者であることには相違がない。宗教の相克を乗り越えて調和を目指すならば、持続的な対話が必要であり、そこには政治問題をからめてはならないということを痛感する。

参考文献

中島岳志『ヒンドゥー・ナショナリズム—印パ緊張の背景』中央新書ラクレ、2002年

中島岳志『ナショナリズムと宗教—現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』春風社、2005年

橋本泰元・宮本久義・山下博司『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版、2005年